

## 鶴田浩二素描

竹中香<sup>1</sup>

鶴田は美しい星の下に生れた青年である、彼は若干二十五歳、映画界に身を投じて以来僅か一年有半にして既にスターとしての素質を十分に認識せしめた稀にみる好漢である。

これは一に彼の天稟の良さを示すものでそれ以外の何物でもない。実に天賦の良さと言うか、彼も又終戦後慧星の如く映画界の人気を一焦点に集めた三船敏郎の如くその天性あり余る素質を以て此の世界に擡した一人である。

而(しこう)して今や上昇線を辿りつつある彼、其所に見受けられる荒削りな太々しさと逞しい激しさを持つ此の男の魅力は未完成なむき出しの人間性から来る本能的な情熱に依って、肉体や性情に有る欠点を曝け出し乍らそれを補って余りある一つの美点に依って見事な生態を發揮している。

而して所謂(いわゆる)、平凡にして非凡な半面を陽日に曝け出し乍ら強靱な生命力に依って人生をのびのびと生きている男、それだけに又一面非常な脆さを持っているが——

彼は良く人に「崩れかけたものの美しさ」を愛すると言う、それは彼のその一面を如実に現しているが、斯う言ったもろさ、それが彼の人間的な美しさを助長しているとしてもその肉体の健康性と精神の反逆は生命の安定感を今一步の所まで追いつめ乍ら未だの感を抱かしめる所以のものであろう。彼も又良く自らの欠点を知ってか独歩の至難なるを語り「小人閑居すれば——」の至言を用いて独り日常を過すの危惧を避けている。

その性情たるや自由奔放、明朗闊達へつらわず、奢らず、飾ることなく常に人間、鶴田浩二の性あるがままをぶっつけて強引にして鮮やかな生を描いている。されば人皆彼に対して好感を以て迎えると断じ得ないにしてもその殆んどは彼の行動なり信念なりに純粹な若い生命の力を感じるのであろう。

おそらく此の事は、彼の性格からして単なる杞憂に終るのであろうが、今日の彼がスタアとしての名声を獲得することに依って、他の凡百のスタアの如く自己を過大評価し自意識過剰に陥り、恰かも教養識見を兼備せる名士の如く、或はその内容の貧しさをカムフラージュする為の傲慢不遜に陥ることなきを望むと共に、眞に人間としての愛情と信念と良識を今日の君あるがままの美しさの中に育くんで行くよう祈って止まない。

友情 —— 彼の美点として特筆されるものは此所に光芒を放つ、その点おそらく何人と言えども容易に為し得ないだろう。彼は日常「己を知る人の為には凡ゆる犠牲を払って尚惜しまない」と語るが如く実際にその信念を行動に依って示す極めて少数の人間の一人である。

されば若し彼の欠点の百を良く補う一つがあるとせば、此所に於て縷々見

<sup>1</sup> 大船宣伝課員、S27には鶴田のマネージャーになる。etc

る性の美しさであり、人間愛の見事な流出であろう、斯くして此所に人間、鶴田浩二の面目躍如たるを見ることが出来る。勿論、その交情に於ては微塵の妥協と打算も許されないし、常に彼の生活意識の最高点（限界点）に於てのみ友情は存在し、その一線から一步も退こうとしない、されば彼の親友たるを誇り得る者幾人を数え得るだろうか。

嗜好 —— 相手に依って斗酒尚辞せず、但し相手が悪ければ一滴と口にしない、酔えば多くを語り、幾分甘ったるい例の口調で仲々辛辣なことをズバリと言う。但し適量を過すと泣き上戸になる処もあり。

女性観 —— どちらかと言えばタイプに依って強い好みを現す。或る意味でのフェミニストである。ある意味と言つては、はっきりしないが、おそらく彼自身も解らないのではなかろうか。

特別にその容貌に捉われないが、情熱的な女を好む。何時だったか彼の泊っている旅館志保原で澤村勉氏と話し合った時なども岡田嘉子のような女に会い度いと一人幾度となく繰返していた。彼もまた時代の幸運児である。